

# ノト クロニクル 記録 能登町歴史・文化情報紙

▶▶▶ 創刊号 ▶▶▶

令和8年(2026)10月1日発行

発行にあたって

能登町には、脈々と受け継がれてきた多種多様な歴史・文化遺産が存在します。その魅力を一言で語り尽くすことは到底できません。

本紙は、そうしたかけがえのない遺産をクロニクル(記録)し、皆さまにお伝えすることを目的としています。

不定期の発行とはなりますが、町内に眠る遺跡や古文書、工芸品、そして歴史的な出来事の数々を分かりやすく紐解いてまいります。

読者の皆さまからも、ご質問やご感想などをお寄せいただければ幸いです。能登の歴史と一緒に見つめ直すきっかけとなれば嬉しく思います。

## 地域の歴史伝える貴重な史料

# 戦国時代の棟札を確認

能登町文化財収蔵庫(真

脇)で、今から約480年

前の天文12年(1543)

に作られたとみられる棟

札が見つかりました。棟札

には「天文十二年」や

「五社権現」の文字が記さ

れており、現在の瑞穂(院

内)にある大峯神社に関わ

る史料と考えられます。

町教育委員会事務局の学

芸員が収蔵庫の整理作業

を進める中で確認しまし

た。

棟札は、神社や寺院など

の建物を建てたり建て替

えたりした際、その工事の

年月日や建築に関わった

人などを記して、建物の屋

根の棟木に取り付ける木

札です。建物の歴史や地

域の信仰を知ることがで

きる貴重な史料となるも

のです。

今回見つかった棟札が入っていた箱な

どには現在大峯神社に隣接している

「霊山寺」の寺号が記されていました。

また、『能登町史 第三巻Ⅱ歴史編』(1

982年)によると、大峯神社はかつて

「五社権現」と呼ばれていました。

また、明治4年(1871)に筆写され

た「大峯山由来書之写」には、「天文十

二年再建棟札一枚」が伝わっていたこと

が記されています。しかし、町史が編さ

んされた当時には、この棟札の所在が

分からなくなっていました。今回見つ

◆神社の修繕、当時の様子を記録

この棟札は、発見時には全体が劣化や

後世の火災の影響で煤けていたため、全

ての文字を解読することができません

でした。今般、県埋蔵文化財センターに

ご協力いただき、赤外線写真撮影をお

こなうことにより、大部分の解読が可

能となりました。

棟札には、天文12年に五社権現の本

殿にあたる「宝殿」の屋根をふき替えた

ことが記されています。

った棟札が、その「天文十二年再建棟札」である可能性が高いのです。



発見された棟札(五社権現宝殿上葺替棟札)



大峯山遠景

の管理者として「院主」の名も記されており、隣接する靈山寺、あるいはその前身となる寺院が五社権現の管理に関わっていた可能性があります。

また、棟札には遷宮が行われた日が「天文十二年三月二十四日」と記され、大工についても「櫛比庄の惣持寺」の大工であったことが記載されています。

「惣持寺」は、現在の輪島市にある総持寺を指すと考えられます。当時、寺院の建物を維持するための大工がいたとみられ、今回の神社の屋根葺き替えには、惣持寺に関わる大工が招かれたと考えられます。

### ◆大峯山は古くから信仰の場

棟札の裏側には、天平勝宝8年(756)に五社権現が再興されたと記されています。天文12年当時に伝えられていた神社の由緒を記したものとみられますが、あくまでも伝承であるため、その記述を素直に信用することができません。

現在の大峯神社には、修験道で信仰される「蔵王権現」を表した木造蔵王権現立像が伝わっており、平安時代後期

ごろに作られたと考えられています。また、隣接する靈山寺には、同じく平安時代後期ごろの制作とみられる木造薬師如来坐像と木造聖観音坐像が安置されています(両像とも町指定文化財)。これらの文化財からも、平安時代後期ごろには、大峯山一帯が人々の信仰を集める「霊場」として成立していたことがうかがえます。

### ◆戦国期の地域を知る貴重史料

大峯山に神社が建てられていたことを示す史料としては、文明12年(1480)の棟札の写しも残されています。このことから、戦国時代が始まるころには、神を祀る社殿が建てられていたとみられます。

文明12年の棟札は写しで、原本の所在が分からないため、現存する当時の棟札としては、今回発見されたものが大峯山の神社の存在を具体的に確認できる最も古い史料となります。

能登町内で確認されている中世の棟札は、今回の史料を含めて10点とみられます。その中でも今回の棟札は5番目に古く、戦国時代の資料としては3

番目に古いものとなります。

戦国時代の文字史料は、現在では新たに発見されることが稀です。今回の棟札は、存在そのものは記録されていたものの、長く所在が分からず、詳しい内容も明らかになっていませんでした。約480年の時を経て、現在に伝えられた棟札。そこには、大峯山を訪れた人々の姿や、神社と寺院が結びついていた当時の信仰のあり方、社殿を建て替えた人々の記録が残されています。能登町の中世の歴史や大峯山の信仰を知る上で、貴重な歴史史料といえます。



木造蔵王権現立像(大峯神社所蔵)

## 能登町 歴史学講座

### ◆下張りはがしワークショップ

(7/25、9/7・13・14開催)

昔の「ふすま」や「屏風」の絵や文字が書かれた紙の下には、何枚もの紙が貼り重ねられています。これを「下張り」といいます。

「屏風」の場合は、6層、6枚の紙の層



下張りはがしワークショップ(9/13 柳田公民館)

があります。そして、絵や文字が書かれている紙の下は見えないため、昔は必要になった紙が使われていました。これを「下張り文書」といいます。

下張り文書には様々なものがありますが、古い時代だと江戸時代の初め頃、今から300年以上前のものが出てくることがあります。

つまり、下張り文書は、私たちに地域の歴史を伝えてくれる「タイムカプセル」なのです。

今回は、その下張り文書をはがしていく作業を一般の方々と一緒に行いました。

作業の内容は…

- 1 不要な枠木などを取り外す
- 2 下張りに霧吹きで水をかける  
※接着剤として使われているデンプン糊が弱くなり、はがれやすくなります  
※かけなくてもはがれる状態なら必要ありません
- 3 慎重に取り外していく  
※水で紙が弱くなることがあります  
※取りにくいときはヘラやピンセットを使います
- 4 テーブルなどの上に置いて乾かす



下張りはがしワークショップ(9/7柳田教養文化館)

はがされた下張り文書は専門家によって整理され、歴史史料として活用されます。

ワークショップは延べ4回実施し、全体で約50人が参加しました。参加者のみなさんは、読めない文字が書かれた紙が貼られていることに興味をいだき、剥がしていく作業を楽しんでいらっしやいました。中学生の参加者は、昭和一〇年代の新聞に授業で習った出来事が掲載されていることに関心を示し、同級生と言葉を交わしながら作業を進めていました。

### ◆講演「食糧危機が襲う…」

その時、奥能登の人々は「  
(9/26開催)

江戸時代、奥能登では豊かな実りを迎えることもあれば、災害などによる凶作・飢饉に見舞われることも度々ありました。その時、奥能登の人々は、どうしたのでしょうか。近世史の研究者である武井弘一氏(金沢大学 人間社会研究域 学校教育系 教授)をお招きして、当時の史料をもとにご講演いただきました。(参加者20人)

江戸時代の納税は米を中心としたもので、社会自体が米を中心としたものとなっていました。農民は稲作に励み、収穫された米を納税することで、やっと一年が終わったと安堵していました。

従来、農民たちは酷使、搾取され、厳しい環境におかれていたと考えられてきました。しかし、当時の史料を見ると、田休みには飲酒やタバコ、様々な芸能などを楽しんでたようです。また、1俵(75kg相当)を軽々と持ち上げて運ぶ農民の姿からは、酷使、搾取される農民像とは違った様子が見えてきます。

江戸時代には、全国で飢饉が幾度か



講演「食糧危機が襲う… その時、奥能登の人々は」(星の観察館 満天星)

7割は育っていたが、8月上旬に重さが13グラムほどのヒヨウが降り積もり、大凶作となったとあります。その後、年貢米の滞納事件が発生し、年貢米を滞納した農民に対しては、完済するよう厳命が下されています。

年貢を5石以上納めている比較的裕福といえる農家では家財や家畜などを処分して返済し、5石以下の零細な農家では諸稼ぎや奉公など肉体労働で金銭を得て返済に充てていたようです。

武井氏は大凶作と年貢滞納事件が起きた原因として、ヒヨウが降ったなど天候が影響している部分はあるが、それだけではないと述べます。

まず、能登では、江戸中期には9月上旬に収穫期を迎える中稲が主に生産されていたことを指摘し、もしも7月下旬に収穫できる早稲を栽培していれば、ヒヨウの被害には遭わなかったとしました。

また、江戸時代の農民たちは年貢を納めていくしか生きるすべがない社会(米納年貢制)

に生きており、食糧が不足する状況であつても米を納税するしかなかったと述べました。

最後に武井氏は、食糧危機は奥能登の農民たちの責任ではなく、人が作った社会の仕組みがこの危機を引き起こした、きわめて「人災」であつたと締めくくりました。

## 町立美術館

### 企画展示

❖「戦場―銃後戦争と能登の人々」

(開催期間 8/12～9/27)

能登半島地震後、文化財レスキュー活動を通じて、多くの貴重な資料が被



美術館展示の様子(上)  
紙芝居と制作した高校生(下)

災家屋から救出されています。その整理が進められる中で、戦時中の郷土を知る手がかりとなる資料が数多く含まれていることがわかってきました。

空襲という物理的な被害のなかった能登において、戦争は郷土にどのような影響を与え、人々は何を感じていたのでしょうか。

能登町が所蔵する資料とともに、救出された資料という「歴史の証言者」を通して、戦争が郷土に残した爪痕を見つめ直す機会として企画しました。

会場は、「戦場」(出征兵士に贈られた日章旗、戦場から家族に送られた手紙、特攻隊員の遺品のほか、ジャワ島に出征した羽根万象氏の関連作品など)、「銃後」(国防婦人会関連品、貯金呼び掛ける戦時中のポスター、当該期の町内写真ほか)に分けて展示しました。また、「戦後」として、松波中学校所蔵の重光葵の書と、学校に送られた経緯を調査した能登高校生の紙芝居が展示されました。

#### 【編集・発行】

能登町教育委員会事務局文化財係  
(石川県鳳珠郡能登町  
字宇出津ト字50番地1)

☎(07668) 6218537



バック  
ナンバ